

2010-2011 年度 ITP-EUROPA 派遣報告書

1) 氏名

小久保真理江

2) 派遣先

ボローニャ大学 (Università di Bologna)

3) 派遣期間

平成 22 年 10 月 1 日～平成 23 年 7 月 24 日

4) 派遣の概要

共同学位授与制度のもとでボローニャ大学に留学し、ニヴァ・ロレンツィーニ先生の指導を受けながら、イタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼについての研究を進めた。

派遣先での研究テーマは「チェーザレ・パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学・映画の影響」である。イタリアの詩人・小説家チェーザレ・パヴェーゼ (1908-1950) は、アメリカ文学の紹介者でもあり、まだアメリカ文学が広くは知られていなかった 1930 年代からアメリカ文学作品の翻訳や批評に携わった。アメリカ文学はパヴェーゼ自身の詩や小説にも少なからぬ影響を与えたと言われる。また、アメリカ映画を特に好んだパヴェーゼは 1920 年代から頻繁に映画館へ通い、映画に関する文章も残している。アメリカ文学とパヴェーゼとの関係については多くの研究があるのに対して、アメリカ映画との関係についてはまだいくつかの短い論考しか存在しない。派遣先のボローニャ大学では、映画の影響についても併せて検討することによりパヴェーゼとアメリカ文化との関係に新たな光を当てることを目指し研究を進めてきた。

派遣期間中は同テーマでの博士論文執筆のための作業を中心的に行った。イタリア文学のみならずアメリカ文学や映画に関する広範な知識を必要とするテーマであるため、ボローニャ大学図書館で関連文献を読む作業に多くの時間がかかった。作業を進めるにあたっては、指導教員のロレンツィーニ先生の外、同じくイタリア文学を専門とするコランジェロ先生や映画を専門とするマンゾリ先生に面会し、重要文献や論文の構成について助言を受けた。また、こうした研究活動の傍ら、定期的で開催される博士課程の講義やセミナーにも出席し、幅広い知識の吸収に努めた。2010 年 12 月にはボローニャ大学で開催された ITP 国際セミナーに参加し、パヴェーゼの詩と映画との関係について研究発表を行った。2011 年 4 月 4 日から 19 日までの期間は、アメリカ合衆国に滞在

し、ニュージャージー州で開催された Northeast Modern Language Association (NeMLA) の第 4 2 回年大会にて研究成果を発表する他、近郊の図書館で博士論文執筆に必要な資料調査も行った。アメリカへの短期派遣後は再びボローニャで博士論文の執筆作業に取り組んだ。執筆した章については、ボローニャ大学のロレンツィーニ先生、コランジェロ先生など複数の方々から意見をいただき、大幅な加筆修正を行った。

5) 派遣の成果

ボローニャ大学図書館に所蔵されている豊富な資料・文献に目を通すことによって、関連先行研究の傾向・特徴をより正確に把握し、自らの立場や方向性を定めるとともに、研究に独自性を持たせるための切り口を見つけることができた。具体的には、アメリカンモダニズムと大衆文化との関係についての近年の研究成果を取り入れながら、パヴェーゼのアメリカニズムを新たな角度から再検討するというアイデアを得ることができた。

研究を進めていく過程では、視野が狭くなってしまうことや逆に議論が拡散してしまうこともあったが、ボローニャ大学の先生方からの助言によって、新たな視点を取り入れたり、広がりすぎた議論を絞り込むことができた。マンゾリ先生の紹介を通して連絡を取ったトリノの映画研究者からテーマに関わる貴重な資料(20世紀前半のトリノにおける上映映画の詳細なリスト)を見せていただけたことも研究にとって大きな助けとなった。

派遣期間中に行った二度の研究発表では、各時点での自らの考えを簡潔にまとめることによって博士論文執筆への足がかりをつかむとともに、先生方のコメントや他の発表内容から多くの刺激を受けた。2010年12月のITP国際セミナーでディスカッサントとコメンテーターを務めて下さったコランジェロ先生、アスカリ先生からは、セミナーの際のみならず、その後も研究の方向性や関連文献について貴重な助言をいただいた。2011年4月のNeMLA学会発表では、アメリカ・イタリア両国の言語・文化に通じる研究者と交流し、意見を交わすことができたのが大きな収穫であった。また、学会参加後のアメリカにおける短期資料調査では、イタリアで入手困難な文献に目を通すことができた。

発表原稿や執筆中の博士論文については、研究者の友人やボローニャ大学のロレンツィーニ先生、コランジェロ先生から多くの意見をいただき、原稿を大幅に改善することができた。また、内容・文体両面について綿密な添削を受けることによって、イタリア語で論文を執筆する上での注意点や今後の課題をより明確に認識することができた。

6) 今後の課題

次年度に博士論文を完成させられるよう、議論を絞り込み執筆作業を計画的に進めることが最大の課題である。今年度の派遣期間中は、ボローニャの図書館に所蔵される膨大な資料文献に目を通すことに時間をかけた結果、テーマに関する知識を深め、論文の構想を改善することができたが、それにより執筆作業が遅れてしまったことは大きな反省点である。次年度の派遣では、これまでの資料調査や先生方からの助言を活かして、論文執筆を集中的に進めたい。

また、今年度の派遣期間中には、博士論文を執筆する過程で、自らの学術的な言語運用能力についても問題点を改めて痛感した。より多くの言葉や構文を意識的に蓄積し、それらを自らの確に選びとり用いる能力を高めていくことが今後も大きな課題である。厳密で説得力ある議論を展開できるよう、先生方の添削やコメントから学んだことを最大限に活かしながら執筆と推敲の作業を繰り返すことにより、イタリア語での表現力を高めていきたい。